

タイ語母語話者における日本語授受動詞の習得研究 ——「くれる」使用を中心に——

甲斐田 和子

1. はじめに

授受動詞は日本語母語話者が日常会話の中で多用している人間関係の中で欠かすことのできない恩恵を表す動詞である。しかしこの恩恵性は日本語独特のものであり、日本語学習者にとって適切に使うことは困難である。しかし適切に使用しなかった場合、相手に不快感を与えてしまう。ではこの授受動詞を指導する上で必要なこと、気をつけなければならないことはどんなことであろうか。それを探るためにタイ語母語話者における授受動詞の習得研究を行った。

2. 先行研究

2章では授受動詞の先行研究について見ていきたい。

2.1 日本語授受動詞の視点制約

日本語の授受動詞選択においては、主語が行為の与え手（動作主）になるか、受け手になるかだけでなく、話者が与え手の視点をとるか受け手の視点をとるかも大きな要素である。「あげる」文では、主語は行為の与え手であり、与格目的語に行為の受け手がくるが、この場合話者の視点は行為の与え手に置かれている。しかし「くれる」文では主語と与格目的語は変わらないものの、話者の視点は行為の受け手に置かれている。そして「もらう」文では主語は行為の受け手になり、与格目的語に行為の与え手がくる。

(a)	Xが	Yに	<u>あげる。</u>
	行為の与え手*	行為の受け手	
(b)	Xが	Yに	<u>くれる。</u>
	行為の与え手	行為の受け手*	
(c)	Xが	Yに	<u>もらう。</u>
	行為の受け手*	行為の与え手	(*は話者の視点のあるところ)

この視点について、久野（1978）では「カメラ・アングルの一貫性」「共感度」「対称詞の視点ハイアラーキー」「視点の一貫性」「授与動詞の視点制約」「発話当事者の視点ハイアラーキー」「談話主題のハイアラーキー」等、7つの制約を挙げている。これらの視点制約は日本語独特のものであり、日本語学習者にとって習得困難な制約であると考えられる。

本研究ではこの久野（1978）の制約を引用し、主に「～は私にくれる。」という文を「～は私に

あげる。」などとした場合、それは「授与動詞の視点制約」⁽¹⁾に反するものだとする。「授与動詞の視点制約」は「くれる」を与格目的語（授受の受け手）寄りの視点をとるという制約であり、「～は私にくれる。」という文限定の意味ではない。しかし与格目的語が「私」以外の第三者である場合、話者の第三者に対する「共感度」⁽²⁾が判断できるか否かが問題になる。従って、第三者間の授受の視点制約の問題で、例えば「～は私の母にくれる。」という文を「～は私の母にあげる。」とした場合は「共感度」が理解できていないための誤用として扱う。

2.2 授受動詞の習得研究

授受動詞の習得研究では、坂本・岡田（1996）が多国籍の日本語学習者を対象に空欄補充形式の調査を行っている。坂本・岡田（1996）では授受動詞の習得は日本語能力が高くなるにつれ進むこと、学習者のレベル・母語によって誤用の形が異なること、出題形式・視点の置き方を把握できるかどうか为正答率に影響を及ぼすことが明らかになっている。

また甲斐田（2006）では中国語母語話者においては授受の本動詞「あげる」「くれる」「もらう」のうち「くれる」が最も習得困難であることが明らかになっている。また「くれる」の設問の中にも「共感度」の判断をしなければならない問題のほうが「視点制約」の問題より難易度が高いことが明らかになっており「くれる」習得に段階があるという結果が出ている。

2.3 授受動詞の対照研究

奥津（1983）では中国語・朝鮮語・英語と日本語の授受動詞を比較研究している。それによると「あげる」及び「くれる」に相当する動詞は英語において「give」、中国語において「給」の一語に相当し、朝鮮語においては敬語表現を含む3種あることが挙げられている。

また、日本語とタイ語の授受表現について Pattarawan（2001）では、日本語の「あげる」に相当するタイ語の「hây」について、日本語との違いについてまとめている。それによると、タイ語では授与行為を表す動詞においてタイ語では「hây」の1つであり、与え手の人称関係上の制限がない。またこの動詞のとり目的語においても具体的・抽象的な名詞、また受益者にとって好意的、非好意的なものいずれもあり得る。これに対し日本語では授与行為を表現するのに「あげる」「くれる」の二語があり、両者の使い分けはより複雑であるということである。

つまり、タイ語において授与行為を表す動詞は1つであり、それは英語の「give」や中国語の「給」に相当する。これを踏まえると、タイ語母語話者においても中国語母語話者と同様に母語の干渉により「くれる」習得が最も困難なのではないか、と考えられる。そこで本研究では次のことを明らかにしたい。(1) タイ語母語話者においても「くれる」習得が一番困難であるかどうか。(2) 「くれる」において先行研究に見られたような階層が確認できるかどうか。(3) 誤用はどのような原因の元に起こっているのか。以上を明らかにするために調査Ⅰと調査Ⅱを行った。

3. 調査 I ペーパーテスト形式

3.1 調査目的

調査 I ではペーパーテストを行った。ペーパーテストでは学習者に多い誤用を把握することと、先行研究で得られた仮説を検証する目的で行った。

3.2 調査対象

調査対象はウッタラディット・ラチャパット大学 (Uttaradit Rajabhat University) の日本語専攻に在籍する学生 2 年生から 4 年生までの計 60 名である。被験者は全員タイ国籍のタイ語母語話者である。4 年生に在籍する学生 29 名 (総学習時間数 885 時間)、3 年生 16 名 (総学習時間数 615 時間)、2 年生の学生 14 名 (総学習時間数 360 時間) である。

3.3 調査方法

本調査で行ったペーパーテストでは人間関係の状況設定を明確化するため、イラストを見ながら叙述形式で提示された「あげる」「くれる」「もらう」文の、3 つそれぞれに正しければ○、間違っているものは×、わからないときには?をつける形式で行った (図 1 参照)。これは従来のペーパーテストに多かった空欄補充形式で行う場合、「あげる」と回答した際には他の「くれる」「もらう」については必然的に選べなくなり、学習者が仮に「あげる」も「くれる」も両方使えるのではないかと考えた場合のプロセスは現れない。それらのプロセスも含め学習者の考えを見るため 3 つの選択肢を設け、○の数及び×の数を指定せず、わからないときは?をつけるように指示をした。

また、「くれる」使用に関して問題があるという仮説のもとに「くれる」問題の種類を多く設定した。

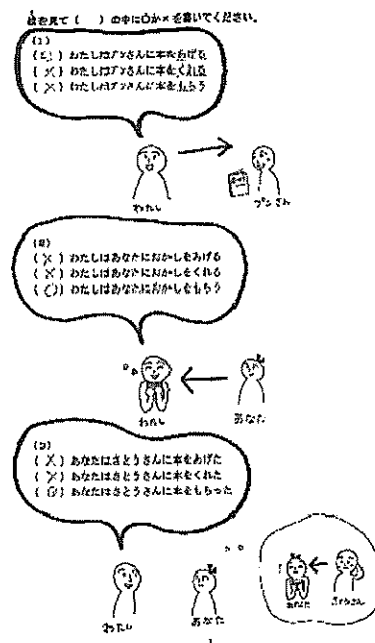


図 1 ペーパーテスト

3.4 結果と考察

3.4.1 全体の正答率

まず始めに全体の正答率を右の図で見たい。グラフを見ると、全体の正答率は「あげる」「もらう」「くれる」の順で高く、3 年生を除いた結果も同じである。3 年生においては「もらう」の正答率が一番高く、次いで「あげる」「くれる」の順

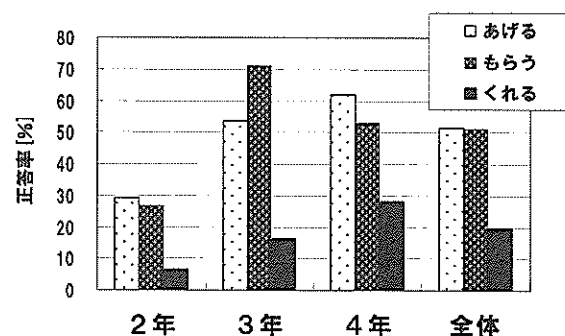


図 2 全体正答率

になっている。また、正答率は2年生、3年生、4年生と学年が上がるにつれて高くなり、日本語能力が高くなるにつれて授受動詞の習得も進むことが確認できた。さらにこのグラフから言えることは「くれる」がどの段階においても正答率が著しく低いということである。

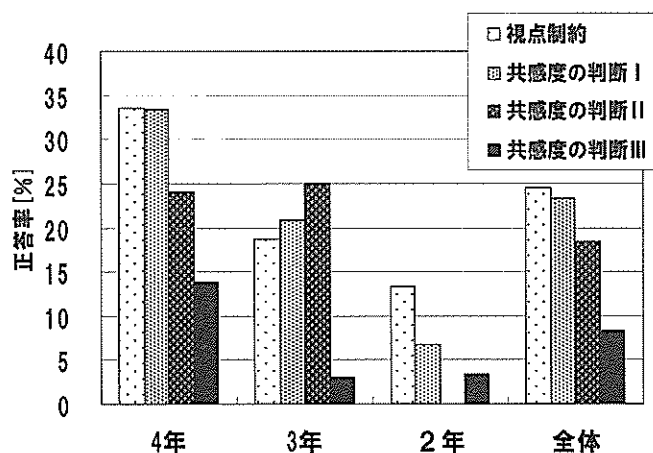
3.4.2 「くれる」設問の分類

では、正答率の最も低かった「くれる」設問について詳しく見ていきたい。「くれる」設問は全部で10問設定した。10問中、一番正答率の高かった問題は授受の受け手に「私」がくる「視点制約」の問題「あなたは私に～をくれる。」（全体正答率（以下略）20.9%）であった。逆に一番正答率の低かった問題は授受の受け手に「あなた」がくる「共感度」の判断を伴う問題「誰かがあなたに～をくれる。」（4.6%）であった。他には同じように「共感度」の判断を伴う問題の中で「〇〇さんが私の母に～をくれた。」（16.6%）や「あなたは私の母に～をくれた。」（16.7%）のような受け手に身内の第三者がくる問題はその間に位置している。また「K先生は学生にくれた。」（8.9%）のように与え手・受け手ともに第三者の授受も難易度が高いことがわかった。

以上の「くれる」の設問ごとの正答率の結果を、授受の受け手によって整理し、以下のように分類する。

- (1) 授受の与え手が第三者、受け手が「私」の場合（「視点制約」の問題）。
- (2) 授受の与え手が第三者、受け手が「私の母」などの身内の場合（「共感度」の判断の問題Ⅰ）。
- (3) 授受の与え手が第三者、受け手も第三者の場合（「共感度」の判断の問題Ⅱ）。
- (4) 授受の与え手が第三者、受け手が「あなた」の場合（「共感度」の判断の問題Ⅲ）。

以上のように分類した上で左のグラフを見てみると、正答率が階段状になっており、3年生で



は順番が違っているものの、全体で見ると前述の(1)から(4)の順番で正答率が低くなっていっていることがわかる。このことから「くれる」の中にも難易度の高いものと低いものとに分けられることがわかる。

図3 分類ごと正答率

3.4.3 誤答の傾向

では次に「くれる」設問における誤答の傾向を見てみたい。

次ページのグラフ3-3は、回答を正答率、誤答率、「あげる」と「くれる」両方に○をつけた場合の誤答率を示したものである。ここで注目したいのは誤答の中でも「あげる」「くれる」両方

を○にした場合の誤答が目立つことである。2 年生では約半数がこの回答をしており、これは学年が上がるにつれて減少していく。また「視点制約」では「あげる」「くれる」を両方○にした誤答が多く、これは「共感度の判断Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」と段階が進むにつれ、少なくなり、代わりに「あげる」と答える誤答が増えていくという結果であった。

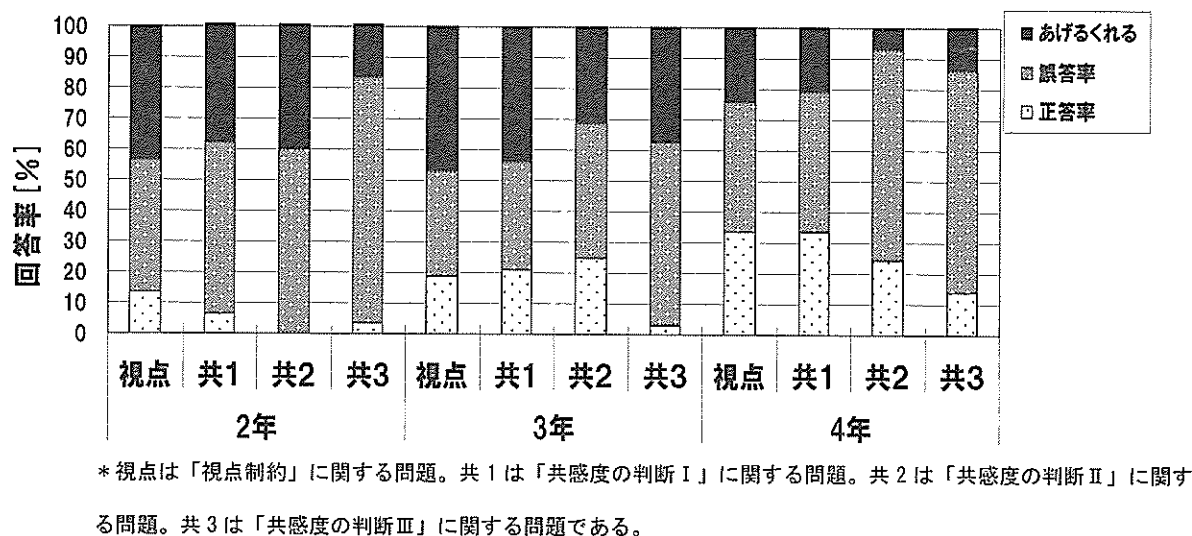


図4 誤答の傾向

3.5 調査Ⅰのまとめ

以上の結果を元に調査Ⅰのペーパーテストの結果をまとめる。

- (1) 授受動詞の正答率は「あげる」「もらう」「くれる」の順で高い。
- (2) 「くれる」は難易度が最も高く、中でも正答率をもとに大まかに以下のように分類でき、習得は次のように進んでいくという可能性が示唆された。
 - (a) 「視点制約」の問題
 - (b) 「共感度」の判断の問題Ⅰ
 - (c) 「共感度」の判断の問題Ⅱ
 - (d) 「共感度」の判断の問題Ⅲ
- (3) 「くれる」設問の誤答は「あげる」と「くれる」を両方使えるとする誤答が最も多く、これは習得が進んでいない初期段階で多く見られる。
- (4) 「視点制約」の問題では主な誤用は「あげる」「くれる」を両方使えるとする誤答で、「共感度」の判断の問題Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと進むにつれ、この誤答は減り、代わりに「あげる」の過剰一般化が見られるようになる。

次章ではこれらの結果を裏づけるためにフォローアップ・インタビューを行った。

4. 調査Ⅱ フォローアップ・インタビュー形式

4.1 調査目的

調査Ⅱは前章 3.5 (1) で見られた考察を裏付けるために行った。また 2 章のテスト形式の調査では授受動詞選択の結果のみ見ることはできるが、被験者がその授受動詞を選択したプロセスを見ることができない。そのため本章のフォローアップ・インタビューでは、質的な面から被験者の授受文の生成プロセスを見ていきたい。

4.2 調査対象

2 章で行ったペーパーテスト調査の被験者のうち「視点制約」が理解できていないと考えられる学生 (S13)「共感度」の判断の問題Ⅰができないと思われる学生 (S14)「共感度」の判断の問題Ⅱができないと思われる学生 (S5) 計 3 名にフォローアップ・インタビューを行った⁽³⁾。

4.3 調査方法

被験者 (S) とインタビュアー (I) の 1:1 の半構造化インタビュー⁽⁴⁾ 形式で行った。インタビュー内容は IC レコーダーで録音し、後に文字化したものを考察に用いた。

4.4 結果と考察

4.4 ではそれぞれの被験者のスクリプトから前章の裏づけを行う。

4.4.1 「視点制約」が理解できていないと考えられる S13 の場合

(1) 「視点制約」の問題「第三者は私にくれる。」という設問について

I : 「ワンさんは私に本を」？

S13: 「くれました」。

I : うん「くれました」いいですね、これ「あげました」はどうですか？

S13: うん。

I : 両方いいですか？2 ついいですか？

S13: うん。

「ワンさんは私に本をくれた。」という文に対して最初に「くれました」を選んだことで「あげました」より「くれました」のほうがいいと考えていることが推測される。しかし「あげました」について問うと、両方使えたと答えている。

(2) 「共感度」の判断Ⅰの問題「第三者は身内にくれる。」という設問について

I : 「カイさんは私の母に花を」？

S13: 「あげました」。

I : 「あげました」ね、これ「くれました」はどうですか？

S13: はい。

I : 「あげました」も「くれました」もいい？

S13: はい。

「共感度」の判断Ⅰでは始めに「あげました」を選んでいることから、「くれました」より「あげました」のほうが良いと考えていることが推測されるが、やはりこの問題でも両方使えると答えており、この2つの動詞の使い分けはかなり曖昧である。

(3)「共感度」の判断Ⅲの問題「第三者があなたにくれる。」の設問について

I : 「先生の友だちはあなた」これ「あなた」はS13さんの友だちね、に？

S13: 「あげました」。

I : はい、じゃあ「くれました」は？

S13: 「くれました」は私がもらわなければならない。

「共感度」Ⅲの問題になると「あげる」を使わなければならないと答えている。

以上より、S13は受け手が私のときに「くれる」を使うと考えてはいるものの、受け手が私から遠のいていくにつれて「くれる」使用からも遠ざかり「あげる」使用に偏っていくことがわかる。これは調査Ⅰの考察を支持していると言える。

4.4.2 「共感度」の判断ⅠができないS14の場合

(1)「視点制約」の問題について

I : 「あなたは私にプレゼントを」？

S14: 「くれました」。

I : 「あげました」は？

S14: うーん。「あげました」は・・・。えーと「くれました」を使ったほうが良いと思います。

S14は「視点制約」の問題ではかなりはっきりと「くれる」を使用すると答えており「あげる」について問うと、どうして「あげる」を使わないのか説明することはできないものの「くれる」を使うべきだという考えがわかる。また、以下のスクリプトを見てみると、

I : じゃあ例えば、私が、S14さん、どうぞ。はい、これ何とといいますか？

S14: 先生がわたしに、これ、これなんだっけ、サボテン？サボテンをくれた。

I : うん。「くれた」？

S14: はい、先生は目上の人ですから。

のように授受動詞の選択を目上か目下かによって使い分けようとしていることもわかった。

このような目上・目下で授受動詞を選択しようとする傾向はS13にも見られた。

(2)「共感度」の判断Ⅰについて

I : 「カイさんは私の母に花を」？これは？

S14: 「あげた」。

I : 「あげた」？

S14: うん。

I : 「くれた」は？

S14: 「くれた」も大丈夫だと思う。

「共感度」の判断Ⅰの問題では以上のように、基本的には「あげる」を使い「くれる」も使えると答える一方で、以下のようにも話している。

I : 「あなたは私の母に」？

S14: 「くれた」・・・「あげた」うーん。うんうんうん。「あげた」は。

I : 「くれた」がいい？どうして？

S14: うん、母はウチの人ですから。ソトがウチの人に「くれた」？

以上からわかるように、「あげる」と「くれる」の使い分けについて非常に混乱しているものの、ウチの人・ソトの人という身内の共感度を判断しようとしている様子も見られた。

(3) 「共感度」の判断Ⅲについて

I : 「先生の友だちはあなたにお菓子を」？

S14: 「あなたにお菓子をあげた」・・・「あげた」「くれた」、・・・「あげた」。

「共感度」の判断Ⅲの問題では「あげる」を使用すると答えており、S14 の場合も、「視点制約」の問題、「共感度」の判断Ⅰ、Ⅱと進むにつれ「くれる」から「あげる」へ移っていくことがわかる。

4.4.3 「共感度」の判断Ⅱができない S5 の場合

(1) 「視点制約」の問題 及び「共感度」の判断Ⅰについて

I : 「あなたは私の母にあげます」はいいですか？（共感度Ⅰ）

S5: 「あなたはお母さんにあげます」？だめ。私と私の家族の人が「あげます」を使います。

I : じゃあ「私の母は私の妹にお菓子を」？

S5: 「やります」

I : うん、じゃあ「私の妹は私に」？（視点制約）

S5: 「くれます」。

S5 は明確に「あげる」と「くれる」を使い分けており、受け手が私及び家族の場合（即ち「視点制約」と「共感度」の判断Ⅰの問題）は「くれる」を使用すると答え、「あげる」使用の可能性を否定している。また、「あげる」の使い方にも明確なルールを持っており「くれる」使用が「あげる」の制約に密接に関わっていることがわかる。

(2) 「共感度」の判断Ⅱ及びⅢの問題について

I : 「先生の友だちはあなたにお菓子を」？（共感度Ⅲ）

S5: 「あげます」。

I : 「くれます」はだめですか？

S5: だめです。

I : 「先生は S15 (S15 は S5 の親友) に本をくれます。」はいいですか? (共感度Ⅱ)

S5: 「くれます」は使いません。

I : 使いませんか、「あげます」がいいですか。

S5: うん、わたしは関係ない。

さらに「共感度」の判断Ⅱ及びⅢでは「くれる」使用を否定し「あげる」を使用すると答えている。理由は自分とは関係がないと述べていることから、「視点制約」と「共感度」の判断Ⅰ、つまり受け手が「私」や「私の家族」の場合のみ「くれる」を使い、第三者同士の授受場面では「共感」しないということがわかる。これは、私や私の家族に対する「くれる」使用の際も、その恩恵を追及するためではなく、受け手によって機械的に使い分けている可能性がある。

4.5 調査Ⅱのまとめ

調査Ⅱで得られた結果は以下のような表にまとめられ、前章で得られた結果は支持された。

	受け手			
	わたし (視点制約)	身内 (共感度Ⅰ)	第三者 (共感度Ⅱ・Ⅲ)	
S14	「くれる」>「あげる」	「くれる」<「あげる」	「あげる」	*「くれる」>「あげる」はどちらも使えるが「あげる」より「くれる」のほうがいいという意味。「あげる」>「くれる」はどちらも使えるが、「くれる」より「あげる」のほうがいいという意味である。
S13	「くれる」	「くれる」>「あげる」	「あげる」	
S5	「くれる」	「くれる」	「あげる」	

また、授受の当事者が目上か目下かなどで授受動詞を使い分けようとしたり、ウチとソトなどの概念を用いて使い分けようとしたり (但し不完全)、また「あげる」の制約を用いて使い分けようとしたりすることがわかった。

5. おわりに

以上、「くれる」を中心に授受動詞の習得を見てきた。今回行った 2 つの調査から言えることをまとめると、(1) 授受動詞は大まかに「あげる」「もらう」「くれる」の順で習得が進む。(2) 最も難易度の高い「くれる」には習得に段階がある。その段階とは「視点制約」、「共感度」の判断Ⅰ、「共感度」の判断Ⅱ及びⅢである。(3) 学習者は授受の当事者の年齢・属性また「あげる」制約などを用いて授受動詞を選択している。

以上を元に教え方を考えると、次の段階で授受動詞を教えてくことが望ましいと言える。1. 3 つの動詞それぞれの視点の取り方や主語と与格目的語の位置など。2. 「あげる」「くれる」の視点制約。3. 恩恵追求としての「くれる」使用と、話し手の受け手に対する共感度。これは 4.4.3 の S5 のよう機械的に授受動詞を判断するのではなく、そこにある恩恵性を教えることである。

今後はペーパーテスト形式を改善し、より自然な人間関係の中を提示し調査をしたい。また、

前述の 3.について、効果的かつ具体的な教え方へと重点を移して研究を続けていきたい。

注

- (1) 「授与動詞の視点制約」「クレル」は話し手の視点が、主語（与える人）よりも与格目的語（受け取る人）寄りの時にのみ用いられる。「ヤル」は、話し手の視点が、主語寄りか、中立の時にのみ用いられる。（久野（1978）より抜粋）
- (2) 「共感度」 文中の名詞句 x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感（Empathy）と呼び、その度合すなわち共感度を E(x)で表わす。共感度は値 0（客観的描写）から値 1（完全な同一視化）迄の連続体である。（久野（1978）より抜粋）
- (3) 2 章の調査結果から「共感度」の判断Ⅱを理解し、「共感度」の判断Ⅲを理解できていないと考えられる学生がいなかったため、この 3 名 3 パターンについて行った。
- (4) 予め大まかな質問項目だけを用意しておき、後は学習者の答えに応じて質問していく形式で、質問項目はそれぞれの設問に授受動詞の何を入れるか、またなぜそれを選ぶのかが、全ての被験者に共通する質問項目であった。

謝辞

今回調査に協力してくださったウッタラディット・ラチャパット大学の学生の皆さん、先生方、口頭発表後に貴重なコメントをくださった早稲田大学の舘岡洋子先生、資料作成に数々の助言をくださった藤井廣男氏に心から感謝の意を表します。ありがとうございました。

参考文献

- 奥津敬一郎（1983）「授受表現の対照研究―日・朝・中・英の比較―」『日本語学』第 2 巻、第 4 号、pp.22-30
- 甲斐田和子（2006）『授受動詞の習得研究―中国語母語話者の「くれる」使用を中心に―』東海大学大学院文学研究科日本文学専攻日本語教育学コース、修士論文
- 久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
- 坂本正・岡田久美（1996）「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア：文学・語学編/南山大学 61 号』、pp.157-202
- 姫野伴子（2004）「「文法の習得」について考える―授受動詞を例として―」国際日本語普及協会 第 20 回日本語教師のための公開研修講座資料、pp.9-15
- J.V.ネウストプニー・宮崎里司（2004）『言語研究の方法』くろしお出版
- Pattarawan Youyen（2001）「受益文におけるタイ・日語の対照研究」『バンコック日本語センター 紀要』第 4 号、国際交流基金、pp.45-58